

夢をもって続ける

アルピニストとして世界で活躍している野口さん。環境保護活動にも熱心に取り組んでおり、エコチル調査サポーターにも登録頂いています。

—いつ頃から登山家になろうと思っていたのですか。

高校生の時です。学校で暴力事件を起こし、停学処分になってプラプラしていた時に、冒険家の植村直己さんの本に出会いました。

あの方の本を読んで、最初から大きな野心を抱いていたわけではなくても、コツコツやることが、結果的に大きな何かに繋がっていくということを強く感じたんですね。自分は勉強もできない。停学にもなった。でもコツコツとやっていけば、何かできるかも知れない。そう感じて、この世界に入ったんです。

—お子さんを山に連れて行くこともあるのでしょうか？

娘が一人いますが、彼女が生まれた頃から、背負って富士山清掃などに連れて行きました。秋頃って寒いので、背負ってると湯たんぽ代わりで（笑）。現場に連れて行ってきますと、言葉で説明する前に、何となくいろんなことを感じているようです。

僕の親父は外交官だったんですが、僕をいろんな現場に連れて行くんです。治安が良くないスラム街などにも、小学生の僕を連れて行く。イエメンにいたときは、二人で国中をグルグル回りましたが、なかなかシビアな現場が多かった。例えば、首都のサナアという町には救急病院が一つしかない。あちこちから患者が運ばれてくるんですけど、医者もほとんどいませんし、野戦病院のように患者が廊下に寝かされていて、そのうちに死んでしまったり。親父になぜこんなところに連れてくるんだと聞いたら、世の中にはA面とB面があるんだと。放っておいても見えてくるのがA面で、自分から行かないと見えないのがB面である。得てして世の中のテーマはB面にあるから、おまえもあちこち行くなら、B面を見ろと言われました。それがすごく頭の中にあるんですね。

去年と今年、娘をアフリカに連れて行ったんですけど、そこでアフリカのA面とB面を見せた。野生動物が暮らす美しい場所だけでなく、密猟の被害や貧困の現場もある。親父が自分にやったようなことをしてるんですね。

—野口さんが力を入れている富士山の清掃活動について、お聞かせください。

97年に初めてエベレストに行きました。それまでエベレストは美しいところだと思って

いたんですが、実際に行ってみたら、ごみがワースと散乱していた。

当時、日本ではさほど注目されていませんでしたが、富士山はごみが多いから世界遺産にならないと、ヨーロッパの登山家は言っていたんです。ある有名な登山家が「世界で最も汚かったのは日本の Mt. Fuji だ」と発言したのが広まって、富士山は世界で最も汚い山というのはヨーロッパの登山家には意外と知られていたんです。

エベレストのごみにも日本語のものがだいぶ混じっていて、いろんな国の登山家から、「お前ら日本人がごみを沢山捨てている。ヒマラヤを Mt. Fuji のようにするのか」と言われたんですね。個人バッシングなら放っておけばいいけど、「おまえら日本人が」と言われて、引くに引けなくなった。じゃあ拾えば文句ないだろうというところから始まったんです。

エベレストでごみを拾ってるうち、これは一部の日本の登山家のマナーの問題じゃなくて、日本の社会の縮図かもしれない。それが富士山の清掃に繋がりました。

それまで、僕らは冬しか富士山に行かなかった。雪と氷に覆われているし、ほとんど人もいないし、汚いという印象はまったく持ってなかったんですが、初めて夏の富士山に行って驚いた。人も多いし、トイレも大問題でした。

まず NPO 法人にいろんな現場を案内してもらったんですが、彼らが最初に案内したのは樹海だった。なんで清掃で樹海なんだろうと思ったら、林道の辺り一面にごみが積まれているんですね。いわゆる不法投棄です。それを初めて見たときに、親父が昔言った「A 面 B 面」というのがパッと頭に浮かんだ。新幹線の中から見える左右対称の美しい富士山、あれが A 面だとすると、樹海の中の不法投棄の現場、これはまさに B 面だと思いました。

富士山清掃活動の参加者は、十数年前は年間 100 人前後でしたが、今では毎年 7000 人くらい来るんです。それだけ全国から参加者が来て、メディアがそれを伝えると、それまでなかなか協力してくれなかった県や市町村、環境省、企業も入ってきた。僕たちは「富士山から日本を変えよう」という言葉を使っていますが、みんなで一緒にやるという形が全国に広がって、日本が変わればと思っています。富士山も、5 合目から上はだいぶ綺麗になりましたし、トイレはほぼバイオトイレに替わりました。活動を始めた頃は、自然を相手に取り組むのが環境問題というイメージを持っていましたが、動植物が環境を破壊するわけじゃない。破壊するのは人間ですよ。人間社会を相手にするのは結構大変です。いろんな立場の人がいて、それぞれの都合や利権もありますし、考え方がある。必ずその壁にぶつかるんですよ。でも、夢があると活動って続くんですよ。

ーシェルパ（※）の子どもたちと接する機会はあるんでしょうか？

シェルパと一緒に山に登ってますけど、そのシェルパが毎年遭難しています。外国人が遭難すると報道されますけど、一緒に死んでいったシェルパのことは表に出ません。そこをどうフォローしていくかを考えて、シェルパ基金を作りました。補償問題の支援もあり

ますが、シェルパの遭難が公になれば、登山隊側もシェルパの使い方に慎重になるだろうと考えたのです。それから、カトマンズの全寮制の学校にお金を入れて、そこに遺児を入学させています。

あとマナスルという山があるんですけど、その地区は非常に貧しく、学校もない。マナスルは、1956年に日本人が初登頂したので、現地でジャパニーズマウンテンとも呼ばれています。その場所で、日本人として何か出来ないかを考え、数年前にマナスル基金を立ち上げました。5年くらいかかってやっと学校が出来たんですけど、何が難しかったかというと、学校を作るのに、村人の半分は反対する。なぜかという、子どもは労働力なので、学校にとられたくないんです。村人の理解がないところで作っても意味がないので、教育がなぜ必要かという話をするんですが、なかなか伝わらない。で、どうしようかと考えました。1953年にエドモンド・ヒラリーさんが初めてエベレストに登ったんですが、その後にエベレストのシェルパの村に学校を作ったんですよ。その学校が一つのきっかけになって、社会的に成功したシェルパがすごく多い。その卒業生から、「自分たちも、学校に行つてここまで成功できた」と伝えてもらって、やっと村人も納得した。それに数年かかりました。

来年からのテーマの一つはネパールに森を作るということです。ネパールは、昔はもっと森が多かったんだけど、寒いし、燃料は基本的に薪なので、みんな木を切っちゃった。木を切るのはいいけど、植えるっていう文化がない。なので、学校の子どもたちと一緒に森を作る意味を考えて、子どもたちから大人たちに森を作る意味を伝えてもらいたい。

ネパールは日本と文化が違うので、ごみを拾うということも、最初はすごく難しかった。ネパールはカースト社会ですから、ごみを集めるのはローカースト、身分がものすごく低い人がやることということです。そのイメージを変えるために、カトマンズにいる日本大使に相談して、彼に大使館の前のごみを拾ってもらったんです。その様子が新聞に大きく出たんですが、なかなかインパクトがあった。ごみを拾うのは最も身分が低いと思っていたのに、日本の大使がごみを拾っているんですから。その影響もあって、ネパールの環境省のようところが、エベレストの清掃活動を始めました。ごみ拾いはローカーストとは限らないということがだいぶ広まってきたんですね。

一エコチル調査はお金もかかりますし、難しい調査なんですけど、日本でしっかりと調査をすれば、他の国々にも結果を活かせるのではないかと思います。

環境問題にしても、日本が学んできたことを伝えることが、同じ過ちを繰り返さないということに繋がっていくでしょうね。大気汚染や海洋汚染に国境ってないですし。海岸線の清掃活動もしているんですけど、日本海の海岸線なんてすごいですよ。あとは西表島も、観光客がいくビーチはきれいですが、マングローブがぎりぎりまで来るところは掃除できない。根っこのところにどんどんごみが入り込んで、歩けないくらいです。地元の人と

清掃をやりましたけど、拾っても拾っても、台風が来ると一からやり直しです。留学生を集めてキャンプをやったんですが、韓国の学生が、流れてきたハングル語のごみを見て、顔を真っ赤にしながら「恥ずかしい」と言うんです。韓国ではこういうことは報じられてないし、清掃キャンペーンが日本のように多くない。卒業して韓国に戻ったら、こういうことを伝えたいと言ってました。でも恥をかくって大事です。僕が活動を始めたきっかけも、エベレストで「おまえら日本人が」と言われて恥をかいたところから始まった。恥をかいても、それがいずれ何かに繋がるんですね。

ーこの調査はまだまだ続きますが、参加者のみなさまに応援メッセージをお願いします。

調査は細かいことの積み重ねですので、大変だと思います。富士山清掃もそうですが、実際にやってることって、ものすごく地味なことなんですよ。でも、それをコツコツ積み重ねた結果、変化がありました。何が大事かという、地味なことをどれだけ積み重ねていけるかということだと思うんですね。つい大きな成果や変化ばかり注目しますが、その過程が大事なんですよね。細かい積み重ね、それが全てだと思います。

エコチル調査も長い道のりですが、応援しています。

※ネパールの少数民族の一つ。ヒマラヤの登山支援など、ヒマラヤ観光全般に従事しており、ヒマラヤの現地人登山ガイドを表す一般名称ともなった。